

■ 創立30周年記念フォーラム

中村 哲 氏と考える アジアの平和と国際貢献

■ 日時 2015年6月11日(木)

■ 場所 ホテルオークラ福岡 4階「平安の間」

創立30周年記念フォーラム内容

■ 基調講演

「アフガンに生きて ～水と緑を創る～」

[講演者]



中村 哲 氏

ベシャワール会 現地代表
PMS総院長

平成22年度 第12回アジア貢献賞受賞者

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州（現：カイバル・バクトゥンクワ州）の州都ベシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任しパキスタン人やアフガン難民のハンセン病治療を始める。その傍ら難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989年よりアフガニスタン国内へ活動を広げ、山岳部医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の治療を開始。2000年からは早魃が厳しくなるアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003年から農村復興の為、大がかりな水利事業に携わり現在に至る。

■ パネルディスカッション

「中村哲氏と考えるアジアの平和と国際貢献」

～民間支援のあり方と地域の平和と安定に求められるもの～

[パネリスト、コーディネーター経歴]

パネリスト



深澤 良信 氏

国連ハビタット福岡本部
(アジア・太平洋地域担当)本部長

1957年静岡県生まれ。1982年国土庁（現：国土交通省）入庁。国連人間居住センター（ハビタット：ケニア）居住専門官、国連人道問題局（スイス）救援調整部救援調査官（アジア担当）、総務省消防庁国民保護・防災部参事官等を経て2013年6月より現職。国土計画、開発政策、災害・防災を専門に、アジア太平洋地域の居住環境問題の改善に取り組む。



二ノ坂 保喜 氏

NPO法人バングラデシュと手をつなぐ会 代表

平成20年度 第10回アジア貢献賞受賞者

1950年長崎県生まれ。長崎大学医学部卒。長崎大学第一外科研修後、救急医療、地域医療の現場で経験を重ね、1996年福岡市野芥に「にのさかクリニック」を開業、在宅ホスピスに取り組む。同時に、バングラデシュと手をつなぐ会の代表として、保健医療と教育の分野での協力を行う。現在は現地NGOと協力の下、看護学校建設プロジェクトに取り組んでいる。2014年地域医療の貢献した医師を顕著する日本医師会赤ひげ大賞受賞。



中原 正孝 氏

独立行政法人国際協力機構 客員専門員
前南アジア部長

1978年国際協力事業団（現：国際協力機構）入団。1999年パキスタン事務所長、2005年アフガニスタン事務所長、2008年から2013年まで南アジア部部長としてJICAのアフガニスタン支援を統括。同期間中にベシャワール会の現地プロジェクトを支援。2013年より現職。アフガニスタン農業省支援のJICAリーダーも務める。福岡県出身。



原田 正隆 氏

西日本新聞社東京支社 編集長

1982年西日本新聞社入社。社会部、東京支社報道部、2005年ソウル特派員、2008年長崎総局長、2013年報道センター長を経て2014年8月より現職。2001年から2002年アフガニスタン、パキスタンでベシャワール会の現地活動取材。インドや東ティモールなどの取材記事多数。

■ 参加者数 624名



中村 哲氏 講演録

「アフガンに生きて ～水と緑を創る～」

講師 中村 哲氏

(ペシャワール会 現地代表、PMS総院長)

終わりの見えない戦乱。760万人もの人々を飢餓線上に追いやってなお進行する歴史的な大旱魃。二重三重の苦難にあえぐアフガンで、30年以上にわたって献身的な活動を続けるペシャワール会。その現地代表として、現地の人々に心を寄せながら、医療活動と水利事業に力を注ぐ中村氏に、これまでの経緯と活動に込めた思いをお話いただきました。

皆さんこんにちは、中村です。現在、私はアフガニスタンで大掛かりな水利事業に携わっています。さきほど立派なお医者さんのように紹介されましたが、実際には川の中で土木作業員などをやっています。一体なぜ医者が、遠いアフガニスタンで土木作業をせざるを得なくなったのか、そのいきさつからお話したいと思います。

アフガニスタンは福岡からまっすぐ西へ約6000キロ、世界の屋根・ヒマラヤ山脈の西側をなす山の国です。面積は日本の約1.7倍。国土のほとんどがヒンズークシ山脈という険しい山岳地帯に、2000万人もの人々が住んでいます。その8割以上を占める農民たちの生計の源は、実はこの白い山々が湛える雪です。これが真夏に少しずつ溶け出してきて、川沿いに豊かな実りを約束します。

アフガニスタンは、さまざまな面で我々が考えるような

近代国家とは異なる文化を持っています。私たちは収入の多いことが豊かだという風に考えがちですが、アフガニスタンには「金がなくても食っていけるけれども、雪がなくては食っていけない」という有名なことわざがあります。何千年もの間、人も動物も植物も雪解け水に頼って生活をしてきた地域なのです。雨はほとんど降らず、降雨量は日本の数十分の一。逆に言えば、水さえあれば豊かな農業生産で生計を立てることができます。実は現在、この水が大きな問題になっています。後ほど詳しく説明したいと思います。

アフガニスタンはかつて民族の十字路と呼ばれたところで、いろんな民族が雑居して住んでいます。現在分かっているだけで20以上の民族と言葉があるそうです。この



バラバラになりやすい民族をkaroujiteまとめているのがイスラム教で、一種の宗教共同体ということが出来ます。地域の諸問題はモスク、日本でいうお寺や寺院が中心となって解決する事情も、日本人には分かりにくい点です。

■「外国人の尺度」を捨てる。

私たちの活動は、今から31年前の1984年、アフガニスタンの東部国境地帯にあるペシャワールで発足したハンセン病根絶5カ年計画に参加する形で始まりました。

このペシャワール周辺は従来からパキスタンの中で最も治安が悪く、爆破事件が日常化するという中で、数年前から私たちは活動拠点を全面的にアフガニスタン側に移しています。現在、現地職員が120名、作業員が常時300名前後、潜在的な作業員も入れると千数百名が従事しています。

現地は貧富の差が甚だしく、数十円のお金がなくて薬を買えずに死んでいく人も数知れない状態。私たちとしても、いかに少ない資金でいかに多くの人に恩恵を及ぼすかという特別な配慮を要する世界です。31年前も、2400名の患者に対してベッドはわずか16床、医療機器といえば押せば倒れるトrolley、耳にあてるとケガをしそうな聴診器が一つきりという状態で始まりました。医療協力は物や金ではないというけれど、やはり物や金も必要だということで、その後ペシャワール会の活動の活発化に伴い、病院の状況も改善されていきました。

当時も今も、最も苦勞するのは、いかにして現地の人々の気持ちを理解するかということです。外国人が犯しやすい過ちは、見慣れないものを見ると自分たちの尺度で判断すること。イスラム特有の女性の被り物(ブルカ等)一つにしても、これを許すべからざる女性蔑視の象徴と呼ぶか、あるいは伝統的な衣服とみるかで、ずいぶん違いますね。私たちは社会運動を行っているわけではありません。どうやって治療するかが主な関心事です。私たちは現地の風習、文化、宗教に関しては、一切これを外国人の尺度、物差しでさばかないことを一つのかたい方針として現在に至っています。

私が行った1984年はアフガン戦争の真ただ中。初めは細々と難民キャンプで治療していましたが、やがてハンセン病コントロール計画自体が先進国側のアイデアであり、現地にそぐわないということが分かってきました。ハンセン病の多発地帯というのは、腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメーバ赤痢などありとあらゆる感染症の巣窟であり、患者は医療設備がほとんどない貧しいアフガニスタンの山の中に多い。我々は医療人の道義として、マラリアで死にかけている人に対して、あなたはハンセン病ではないから診せませんというわけにはいきません。それで私たちは内戦が下火になったあかつきには、そう



いった貧しい地域になるだけ多く診療所を作り、一般の診療もしながら、ハンセン病も特別視せずに感染症の一つとして診るという方針を立て、それに向けて動きました。

そのうち、1992年前後の時期に、我々はソ連の撤退を待って次々と診療所を開設。そうこうするうちに、先が長いということを悟りました。当時ハンセン病をたくさん抱えていることは国の恥だという意識が国際的に強く、アフガニスタン・パキスタン政府は国策上、根絶宣言を出したのです。ところが不思議なことに、患者の発生数はゼロに近づいているのに、実際に我々が診る患者は増えている。

何のことはない、ハンセン病ではなくハンセン病の診療施設が根絶されたのです。したがって上がってくる数字はゼロと、こういうことなんですね。私は医療人として、こんなことがまかり通ってはいけないと。日本側からの補給が続く限り、この地域の患者については最後まで責任を持つ、ということで独立して病院を持ったのが1998年。これで私たちとしても責任を持って地域の患者たちに接することができるようになりました。

■「緑の大地計画」に挑む。

さあ今から、というところに襲ってきたのが、世紀の大旱魃でした。2000年5月にWHO世界保健機関が「おそらく人類が体験したことのない規模」と世界に示した数字は、鬼気迫るものがありました。最も激しい被害を受けているアフガニスタンでは人口の半分以上に相当する1200万人が被災。うち400万人が飢餓線上、さらに餓死線上の人が100万人という数字を出して世界中に訴えましたが、ついに大きな声とはならず、現在も進行中です。

2000年は特にひどく、人口1万人以上の豊かな村々が半年もたないうちに一木一草も生えないような砂漠になってしまったということが、実際に診療所のまわりで次々と起こり、我々の活動に大きな影響を与えました。

当時多かったのは子どもの犠牲者でした。若いお母さんが自分の子どもを胸に抱いて何日もかけて診療所に歩いてやって来る。生きてたどり着くのはまだましなほうで、診療所について外来で待っている間に、子どもがお母さんの胸の中で冷えていくという姿がごく日常的に見られた

2015.6.11. 西日本国際財団-創立30周年記念フォーラム

のです。水がないというのはそういうことです。私たちとしては、医療の限界というか、いくら薬を使っても飢えや乾きは薬では治せないのです、ここに私たちの早魃対策が始まったわけです。

まず2000年8月、診療所のまわりの枯れ井戸の再生を始めました。清潔な飲料水と十分な食べ物さえあれば多くの患者が死ななかったという体験から、その後5年間に1600カ所で飲料水源を確保し、さらに38カ所でカレーズと呼ばれる灌漑用地下水路の再生に成功しました。ところがこれが次第に枯れていく。今からうじて30数カ所残っていますが、水量は非常に減っている状態です。

そうこうするうちに2001年9月11日、ニューヨークのテロ事件が発生し、米軍がアフガニスタンに進駐します。100万人が餓死寸前というときに降ってきたのは、パンや食べ物の雨ではなく爆弾の雨。それがやりきれない。真っ先に犠牲になったのは子ども、女性、お年寄り、そういった人々に数万単位の犠牲者が出たのです。あの当時、日本も含めて国際社会全体がアフガン制裁に傾きましたが、私ははっきり言ってこれは誤りだったと思います。

こうした中でも私たちは方針を変えず、何事もなかったように仕事を続けました。その間にも砂漠化する地域は拡大し、行き先のない人々は食を求めて難民化する。あるいは大都市に流れて職にありつけず、つい悪い仕事にも手を出すという悪循環が生まれ、砂漠化と共に治安がどんどん下り坂になっていきました。この状態の中で、誰もやらねば我々がやらざるを得ない、少なくともこの地域についてはやろうということで、緑の大地計画を立て、100の診療所より1本の用水路を合言葉に、用水路の建設を始めました。2003年のことです。現在27キロ、約3500ヘクタールを潤し、16万人の人々を養う用水路が完成しています。

用水路建設にあたり、重機も資金もなく、完成後のメンテナンス財源も期待できない中で、私たちが考えたのは、日本の古い技術を活かすことでした。日本もアフガニスタンも、急流があり、雨季と乾季の水位差がある。灌漑技術にも欧米などにはない類似性があるに違いない。そこで日本の川を、といっても私の世界はアフガニスタンと九州ですので、九州の川を見て回り、注目したのが筑後川の山田堰でした。湧水と大飢饉に悩まされた220年



前に、日本三大暴れ川といわれる筑後川を見事に制し、現在でも使われている堰です。220年前ですからダンプカーも掘削機もなかった、我々にできないはずはないということで、これのコピーを作ろうと試み、10年かけて成功しました。

改めてすごいなと思ったのが、洪水がきても湧水状態になっても、そこそこの水は入ってくるという、非常に優れた構造です。同様に、地球の引力だけで水を汲み上げられる水車も取り入れ、電気がほとんど通っていない現地で大いに活躍しています。

それと、これは現地にも多少あった技術ですけど、針金の籠に石を上手に詰めて重ねていくと、非常に丈夫な護岸壁ができ上がる。そのうしろに柳の木を植えると、柳の根っこが石の隙間にずっと入り込んできて、針金の耐用年数は15年から20年で錆びてなくなりますが、その後も柳の根っこが生きた籠として石をしっかりと抱きかかえる。非常に優れた昔の人の知恵ですね。これも自分たちで作る。こうして日本の技術を取り入れ、あのインダス川支流のものすごい暴れ川を見事に制したわけです。

この取水方法はアフガニスタンの早魃に有効だということで、拡大する計画を次々と立てています。用水路が延びるたびに緑地が回復し、次々と村人が帰ってきました。かつて我々が息をのんだ早魃の光景がどうなったかという、水がくると完全に村が復活する。砂漠化して50年以上経った地域でも、水がくると見事によみがえり、村人が戻って、以前よりも豊かな農業生産を営めるまでに回復しています。

■「ドクター、これで生きていけます！」

最後の難工事が、ガンベリ砂漠という砂漠の横断工事でした。悪いことに作業が夏にかかり、摂氏53度。数百名の作業員のうち、毎日十数名がバタバタと熱中症で倒れる状況でも、皆作業の手を休めることはなかった。というのも、彼らの願いは、一つは三度三度のご飯が食べられること、もう一つは自分の家族と自分のふるさとで暮らせること、この二つしかない。それも叶わずに難民になったわけですから、もしこの用水路ができるとその願いが叶う。さもなくば再び惨めな生きるか死ぬかの難民生活、あるいは人を殺さざるを得ない悪い仕事しか生きていく術がないという状態。

こうした中で、何とかよりよく生きようとする健全な意欲が、この仕事のエネルギーの大きな秘訣であったと思います。そして2009年8月、全線24キロが試験開通したときに、開口一番彼らが言ったのは「ドクターこれで生きていけます」と。その後、この地域はアフガニスタンで最も豊かな地域として再生しました。現在、さらに数万人の人々が食べていける1000ヘクタールを目指して、砂漠の



開墾が進んでいます。

また現地では単に水がこないだけでなく、熱風が吹きつけてくるんです。せっかく開墾しても一晩で砂で埋まってしまう。そこで熱風を避けるために植林を行い、やっと2、3年前からこれが森に成長して、熱風がこなくなった。現在、用水路沿いの柳とあわせて80万本の植林が行われており、この砂防林の効果で気温が実際に下がり、砂漠の痕跡がなくなりつつあるという状態です。

砂漠で植林ができるというのは当時大きなニュースとして伝えられましたが、技術さえあれば、アフガニスタンは決して貧しい国ではないと実感しました。穀物や野菜類、スイカ、ザクロなどの果物、それから家畜ですね。かつて人や動物が死ぬことで有名で、遊牧民も避けて通っていたガンベリ砂漠が、今では遊牧民のメッカとなりました。こうして、水が出る、植物が生える、動物が集まってくる、私の好きな昆虫類がどンドンくる、それを狙って鳥が入ってくるということで、水というのは特にアフガニスタンにおいては生命の源だということを悟りました。

さらに、水の取り組みはエネルギー問題まで解決します。一般の農村のエネルギーのほとんどは薪でまかなわれますから、植林によって生活必需品である薪の問題も解決できたというわけです。同様にイスラム教徒に欠かせないモスクも、我々は外国人だけが必要なものなら作ろうということで建設し、金曜日に各村長さんたちが集まって水争いなど種々の問題を解決しています。こうして用水路一帯は、アフガニスタンで最も豊かな地域の一つに生まれ変わりました。

■取水技術の確立と拡大へ。

このような地域をともかく広げていこうと、早魃がさらに進行する中、現在も休まずに仕事が続けられています。冒頭でお話したように、あの生命の源である巨大な貯水槽(雪山)、これがゆっくり溶けていたのが、気候変動によって気温が上がってくると一挙に溶ける。私は温暖化が致命的な影響を与えているのではないかと推測しています。そのために洪水が頻繁にある、通過した後は川の水位が下がって水が取り入れられず、農地が荒れてい

く。報道では見られないけれども、こうした早魃の被害が年々拡大し、乾燥もひどくなっていく。これが現在アフガニスタンで進行する最も深刻な問題です。もしアフガニスタンが減じるとすれば、私は戦争ではなく早魃によってではないかと思っています。

私たちは現在、現地に適した取水技術の確立と拡大というスローガンを掲げ、活動を続けています。2010年、マルワリードの用水路の見通しがついた段階で、洪水にも湧水にも強い取水施設は、技術的にも完成度の高いものになりました。用水路に入ってくる膨大な砂も、独自の自動浚渫システムで克服しました。こうやって日本で使われた堰板と現地の吊り上げ機を組み合わせることで、現地に適した技術がほぼ完成したのではないかと思います。

灌漑面積でいうと、2007年のマルワリード用水路の第一期工事終了により千数百ヘクタールが潤せるようになり、2012年にはさらなる取水堰の建設により7000ヘクタールの灌漑が可能になりました。さらに今年度以内に約1万6000ヘクタール、約60万人が暮らせる場所の灌漑に移る予定です。その後2020年をめどに、緑の大地計画の計画地域は終わりますが、これで我々の仕事が完結するわけではありません。現地では、復興支援のディスカッションに飽き飽きしています。もうおしゃべりはいいから実物を見せてくれというのが現地の声です。その意味で、用水路による灌漑はこれ以上ないほど雄弁な実物であり、現地の声に応えるものになっていると思います。今後も私たちは、この実物、成功例をアフガニスタンのより広い地域に拡大すべく、活動を続けたいと思っています。

以上のお話で、なぜ河川工事をやっているかということがお分かりいただけたかと思います。私たちの30年におよぶ活動には今日のテーマ「アジアの平和と国際貢献」と交差する部分があるのではないかと思います。31年間を振り返って今思うのは、人間と自然、人間と人間が折り合わなくては、おそらく人類全体が続かないだろうということです。それによって得られる恵みというのは、皆さんが想像する以上のものがあると思います。そして今後アジアといわず世界中が争いのない世界になっていくことを願って、私の話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

